



先人を敬う心



荒谷 卓

(弘前・会員)

いろいろな国を旅行して気付くのは、博物館や記念館が多く、しかもそれはその国、あるいは地方の中心的建造物として見事に管理

されていることである。

日本では、博物館や記念館というと、さながら絵画や骨董品の陳列所の感もあるが、諸外国の博物館では国家・民族の歴史と伝統を子孫に伝えるためのものが目につく。

そのなかで、国のため、民族のため命をおとした人々は等しく英雄として子孫に伝えられる。それは、たとえ国の体制や指導者が変わろうとも継承されている。これは、いわば世界の良識であり普遍的価値を与えられているようにさえ思われる。

と同時に、このような伝統を維持することにより、将来の国や民族の危機に際し、立ち上がるべき国民の良識を育んでいるのである。

ところが日本では、敗戦を契機に、それまでは諸外国と同様に日本においても敬意を払われてきた英雄を、一転して地の底におとし、

さらには戦争で死んだ人々に対し敬意を払うどころか、意図して他国を侵略した犯罪者でもあるがごとき言い方をするようになった。これは、GHQの占領下の徹底した洗脳教育にもよるが、あくまで戦後日本人自身の責任である。

このような社会風潮からは、日本に何かあっても、そのため命を投げ出そうなどと考える人は出てきにくい。

なぜなら、いくら命をかけたとしても、また社会体制が変われば犯罪者扱いされる可能性があるからである。批判や誹謗は、次ぎなる批判や誹謗を招く。祖先を敬うのは、伝統を築き上げるための知恵でもある。



駐屯地の式典に集う協力者の方々と
(左端 筆者)

また、他国の人であっても、国のため、民族のため命をおとした人を英雄として最大の敬意をはらうのは国際的常識である。

しかし、日本では、自国の英雄に対してさえ敬意を払う社会常識が欠如しているのであるから、諸外国へ行ってもそのような心境になり得ない。他人への敬意の念を抱かない人は他人からも敬意を抱かれないのと同じように、このような日本の風潮が続くかぎり、日本人は他国の人から敬意を抱かれることはないであろう。

せめて我々自衛官は、英霊にたいし最大限の敬意を払う姿勢を保ちたいものである。

(第三十九普連一中隊長・三佐)